

## 海外に羽ばたく

### 第1回 海外の仕事って？

いしがきしげなお きゅうばひろこ せき かつみ  
石垣成直・休場裕子・関 克己

今、土木工学を学ぶ学生にとって、海外というファクターは非常に興味深いものである。そこで、今月から連載する学生のページでは、海外経験の豊富な方に本誌学生委員がインタビューし、読者に楽しんでもらおうと思います。第1回のゲストとして、本誌編集委員も務められた、国際協力銀行の北野尚宏氏に話を聞きに行きました。

北野尚宏 氏 Naohiro KITANO



1959年生まれ

1980～81年 北京語言学院で中国語を学ぶ

1981～82年 清華大学土木と環境工学系に在籍

1983～91年 早稲田大学理工学部土木工学科を卒業し海外経済協力基金に就職  
5年間アジア諸国のプロジェクトを担当した後、コーネル大学大学院にて都市地域計画を学ぶ

1992～97年 4年半北京に駐在した後、同大学院博士課程修了

1997～98年 総務部にて広報を担当

1998～99年 開発援助研究所にて調査業務に従事

1999年～ 国際協力銀行発足に伴い、開発金融研究所 主任研究員

海外というテーマでお話を伺おうと思いますが、学生時代から海外とのかかわりについてご紹介していただけませんか。

私は小さな頃から地理が大好きで、高校時代の先生の影響も受けて都市計画に興味を持ちました。その一方で中学生のときから鍾乳洞の探検を始め、高校3年の時に新聞で中国にはいまだ探検されていない大鍾乳洞がたくさんあることを知ったんです。そこから中国に対する憧れが大きくなっていきました。そして大学に入ってから、当時工学系にしては珍しく、第2外国語に中国語を選択しました。学内の中国語クラブに参加し学生友好訪中団を結成して中国を旅行したり、弁論大会に出場したりしながら中国語や中国事情を学び、大学4年次に中国北京に留学することができました。1年間中国語をひたすら勉強した後、お世話になった中国経済の小島麗逸先生にいただいた研究テーマである、「トイレ事情」について研究するためプロポーザルを書いて、朱鎔基首相の母校でもある工学系の清華大学に晴れて入学することができました。

トイレ事情ですか？

はい(笑)。中国経済の発展度合いを知るためには、テレビの普及度(消費を促す情報源)、人民の服装(生活水準の指標)、トイレ事情の3つが重要だと教えてい

ただいたんです。昔の日本でもそうだったように、当時中国のトイレは汲み取り式が一般的で、都市部の屎尿は有機肥料として都市周辺の農地に運ばれます。そして屎尿を肥やしにして育った野菜が都市住民の食卓に並ぶわけです。伝統的な物質循環システムですね。それが、都市化による近郊農地の減少、化学肥料の普及、衛生事情の変化、水洗便所の普及などにより成り立たなくなっていく。北京や上海の街や近郊農村をまわって、中国が日本と同じ道を歩んでいるのかを実地に調べました。

当時中国留学という珍しいのでは？

そうなんです。文系の学生ならまだしも、工学系は例外的でした。実際、清華大学初の日本人留学生です。中国にかかわるきっかけとなった鍾乳洞もたくさん訪れました。一方、中国で暮らすうちにその土地の人たちに触れ、その広大な国土に根付いた文化や生活にとっても興味を持つようになりました。そして1年で研究を終え帰国・復学し、指導教官であった故・大塚全一先生に励まされながら、中国での研究成果を卒論に仕上げ、無事卒業することができました。

就職に際しての話も聞かせてください。

これもまた、偶然なんです。帰国後、たまたま清華

大学で知り合った友人に誘われて飲み会に参加し、その席で、日本の援助機関である海外経済協力基金の方と知り合い、勧誘を受けたのです。そして、何度も面接を受けた結果、どうにか採用してもらえることになりました。だいぶ後になってから、その先輩から「本当に入るとは思ってもいなかった」と言われましたよ（笑）。

しかし、入社してからというもの、事務的な仕事が多く、私にとっては馴染むのに時間がかかりました。当時南西アジアに対する円借款事業を担当していたのですが、初の海外出張でインドの辺境に行くことになりました。そこでは小型水力発電事業の審査を担当しましたが、心もとない英語でのインド人相手の議論は冷や汗ものでした。心の中では「また中国に行きたいなあ」という感じでしたね。

その思いが報われたのか、3年目からはめでたく中国を担当することになりました。港湾や鉄道建設事業の案件の審査や監理に取り組み、何度も中国に出張しました。ちょうどそのころ清華大学時代の友人の多くがアメリカに留学していることを知りました。「中国の仲間が勉強しに行くアメリカには何があるのか？」と思い、1年がかりで留学の準備をしました。クビになることを覚悟で米国留学を申し出たら、休職扱いとしていただき、コーネル大学の故・パークレイ・ジョーンズ先生のもとで念願の都市地域計画を本格的に勉強することになりました。もちろんアメリカでも大陸や台湾からの中国人留学生たちと親交を深めました。

先進国で他国の方との付き合いはどうでしたか？

そうですね、私はこう思っています。例えば、アメリカにおいてもアジアからの留学生と親しくなることができます。しかし、やはりアジアに行って、現地の学生と親しくなることがとても大きな事だと。私は幸運にも中国・米国と2か国に留学したことで、そう感じました。やっぱり、本当に親しくなるにはその土地の文化の中で現地の人と触れるということが近道です。

そうこうして、博士候補生の資格を取って日本に帰ってきました。学位を取ったのは結局だいぶ後になってしまいました。帰国後、北京に長期駐在するよういわれ急いで結婚相手を見つけて赴任しました。そのとき担当したのが北京の下水処理場の建設プロジェクトです。

トイレとの縁は切れませんね（笑）

友人の書いた本の中では、私のことが「中国のトイレ博士」として紹介されていますから（笑）。

では、国際的なプロジェクトや、国際協力銀行としての仕事について聞いていきたいと思います。

北京の下水処理場建設プロジェクトは、中国の環境分野で国際協力がうまくいった先事例のひとつです。まず、北京と東京が友好都市である関係で、プロジェクトの準備段階で東京都の技術者が技術的なアドバイスを行いました。資金の一部には日本の円借款が利用され、主に海外からの設備の調達に当てられました。国際競争入札の結果、日本製品も納入され、施工には中国の建設会社があたりました。中国の土木技術はかなりのレベルです。完成後は、中国最大、最新鋭の下水処理場として、注目を集め、私も何組もの日本からの代表団を案内しました。さらに、汚泥処理・リサイクル技術に関し日本の技術協力による支援も行われています。

また、現在計画されている巨大プロジェクトとして、「南水北調」という、水量の豊富な長江流域から水不足の華北地方を經由して北京・天津まで1000 km以上に及ぶ水路を建設する事業も担当しました。水源は、長江支流の漢江上流の丹江口ダムです。これはもう時効になったと思うのでお話するのですが、実はこのダムは、偶然にも留学時代に許可をとらずに見学したのが後日発覚し、北京の警察署に呼び出されて罰金をとられた、という私にとってういわく付きの場所でした。国家計画委員会の担当者とは、円借款を供与するための打ち合せを重ねました。しかし、この計画は、投資額が大きい上、多くの省を跨ぐことから、各省間の利害調整など、準備に多大な時間がかかり、残念ながら私が駐在中には実現しませんでした。

現在いろいろなプロジェクトが計画されていると思いますが、良し悪しはどう判断するのですか？

良い質問ですね。円借款は援助とはいっても貸付けを行うわけですから、資金の回収の可能性も大切な要因です。ただし、それだけで判断はできません。インフラ整備を行う場合、直接的な便益の他に、経済成長や社会開発、環境保全への寄与、技術力の向上など、さまざまな間接的便益も生じます。これらの事業効果も判断材料になります。また、事業の実施体制や工期の妥当性についても検討する必要があります。さらに有償援助ですから、相手国の返済能力をよく確かめなければならないことはもちろんです。このようにさまざまな要素を総合的に勘案して円借款の供与を決めるのです。

ヨーロッパなどでは無償援助が主体となっています。しかし、有償援助にはいくつもの利点があります。例え



南水北調プロジェクト  
水路建設予定地にて地元民からのヒアリング



南水北調プロジェクト  
すでに掘削された水路をバックに

ば、無償援助では金額的に限界があり大きなプロジェクトは無理ですが、有償援助では可能です。また、無償だけではやはり援助に頼ってしまう傾向を助長してしまいかねません。日本が国際協力銀行をとおして円借款という有償援助を行っているのは、援助を受けた国の自助努力を促すということに重きを置いているためです。このことに対して、海外からいろいろと批判は受けますが、胸を張って良いと思います。

技術を伝えるということも大切ですよね。

そう、日本のゼネコンやコンサルタントが開発の現場でプロジェクトの建設に従事すること、つまり「顔の見える援助」はとても大切なことです。それとともに最近注目されてきているのが、ソフト面の支援です。技術もさる事ながら、途上国では、インフラの整備や完成後の維持管理に関して、政府として制度・組織面で未熟な部分があり、法律の整備や実施機関の組織能力の向上の面で支援ニーズが高い国が多くあります。私の職場でも、こういったソフト面の支援に力を入れつつあります。最近実施した調査としては、ベトナムの都市交通や都市開発住宅セクターのあり方について先方政府に政策提言したものがあります。

一部の途上国では、政府の財政が逼迫していることを背景に、インフラ整備・維持管理に民間の力を利用していくことが多くなっています。現在日本では、PFIなどのスキームに関心が集まっていますが、ある意味では、民活事業は途上国の方が日本より多くの経験を積んでおり、失敗例を含めて、どんどん学んでいく価値があります。

海外での女性の進出はどのようなものですか。

中国では、女性は日本とは比較にならないほど社会進出しています。土木の世界でも、大学の土木工学科の女

子学生と男子学生の比率は1：5くらいです。中央や地方の役所でインフラ整備を担っている部門の多くに、中堅・管理職クラスの女性がいます。大学の土木系の教官やインフラ関係の設計院にも女性は少なくありません。さすがに、ダムや鉄道の建設現場となると女性のエンジニアは少なくなります。都市土木の現場では、例えば北京下水処理場の工事事務所には課長クラスの女性がいました。

東南アジアの国々でも、女性の社会参加は進んでいます。最近、タイ、マレーシア、フィリピンに出張しましたが、中央官庁で面談した幹部職員は女性が多かったです。アジアの国々に進出している欧米企業でも女性は活躍しています。外資系は給与が高く、中国などでは人気が高いです。

いわゆる土木以外のことに従事している土木技術者が増えているとかがいますが。

中国では、社会的ニーズが高まっている環境分野への進出が目立っているように思います。清華大学でも、私が留学している時は土木工学と環境工学は一つの学



北京 高碑店下水処理場  
竣工式の日処理場建設担当者

科でしたが、しばらくして環境工学は単独の学科になりました。

不動産業や、インフラ整備事業に融資する銀行、ソフト開発会社、シンクタンクなどに就職する学生たちもいます。例えば、私の友人は清華大学の土木工学系を卒業して、経済管理の大学院に進学し、その後日本に留学して計画系で博士号を取得、現在は中国有数のシンクタンクで地域開発や産業振興等の分野でエコノミストとして活躍しています。

日本でも、土木工学科を卒業して、国際機関で活躍する先輩たちがいます。世界銀行やアジア開発銀行にはエンジニアとして就職し、エコノミストとしての仕事もこなす人もいます。日本の官公庁からの出向者も多くいます。

今後援助に関して他に大切なことはありますか

はい、それはあくまで主役は援助を受ける側であり、援助する側ではないということです。自助努力の観点からも、主人公である途上国側のオーナーシップが確保されることは、援助を成功させる最も重要な要素のひとつです。援助する側は脇役として、技術面での協力や政策面でのアドバイス、そして資金を提供することが役目です。他方、よりよい脇役を目指すには、ときには主役を経験することも有益です。私は現在地元である三鷹市の市民参加型の会議に一市民として参加しています。市民が自分たちの住んでいるまちの都市基盤整備や教育、福祉に関する基本計画案を作るんです。そこでは自分たちが地域の担い手です。援助をする側という普段の仕事とは逆の立場に立つことで、援助を受ける側のことが前よりもわかるようになったのは大きな収穫でした。

次に、これからは、1 国だけでなく、その地域全体のことを考えることが大切になってきます。EU における国境を越えた広域インフラ整備などのように、「域内協力」なくしてはできないプロジェクトも多くなってきます。アジアにおいても、地域全体として協力して発展していかなばなりません。成長した国同士が手を組み、下を引っ張り上げるアジア内での協力です。日本の発展はアジアの発展なくしてはありえないと言えます。そのためには、土木の分野を含めて域内協力を担う人材を育てなければなりません。アジアでは、日本も含めて欧米への留学指向が強いですが、日本の大学ももっと国際競争力をつけて、さらに留学生を受け入れるとともに、アジアの国々に分校や提携校をつくって、アジアの人材育成に貢献することが期待されていると思います。

最後に、国同士のつながりは、政府同士のつながりだ

けでなく、大学・研究機関・自治体・NPO・NGO から個人にいたるまでいろいろなレベルでの重層的なつながりが重要です。道が一つしかなければ、それがふさがった時に通行はできなくなりますが、他に道があればふさがっていない道を通って行き来ができるわけです。

なるほど、多層的なつながりになれば個人の意見が個人のものとしてとってもらえますよね。

最後に、学生のページということで、ひとことお願いいたします。

一言なら、「海外に行け、そして友人をつくれ！」です（笑）。特に日本と関係の深いアジアへです。

現地の学生と深い絆を作ることが自らの視野を大きく広げてくれます。たとえ、海外に行けなくとも、自分の研究室に留学生がいるなら、仲良くなっておいたら将来ものすごい宝になりますよ。そして、「将来はアジアの友人たちとともに、アジアの域内協力に貢献するんだ！」といった大きな夢をもち、是非それを実現してください。

今日はとてもためになり、面白い話を聞かせていただいて、本当にありがとうございました。



北野さん（右から2番目）と学生委員（右から関、一人おいて休場、石垣）

この記事に対する感想、ご意見は下記までお寄せください（文責 石垣成直）。

編集

石垣成直 京都大学大学院（学生会員）  
休場裕子 東京工業大学大学院（学生会員）  
関 克己 中央大学大学院（学生会員）

E-mail : edi@jsce.or.jp